

Trends in Bronchopulmonary Dysplasia Among Extremely Preterm Infants in Japan, 2003–2016

中嶋, 敏紀

<https://hdl.handle.net/2324/6758959>

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士 (医学), 論文博士
バージョン :
権利関係 : (c)2020 Elsevier Inc. All rights reserved.

(別紙様式2)

氏名	中嶋 敏紀
論文名	Trends in Bronchopulmonary Dysplasia Among Extremely Preterm Infants in Japan, 2003-2016
論文調査委員	主査 九州大学 教授 加藤 聖子 副査 九州大学 教授 田尻 達郎 副査 九州大学 教授 二宮 利治

論文審査の結果の要旨

本研究は本邦における超早産児の慢性肺疾患（bronchopulmonary dysplasia, BPD）発症頻度の年次推移と、リスク因子を明らかにすることを目的とし、2003-2016年に本邦のNeonatal Research Network参加施設で登録された在胎週数22-27週の児19,370例の背景・臨床データを解析した。全体の死亡率と修正36週におけるBPD罹患率および生存例におけるBPD発症リスク因子を調査した。

対象19,370例のうち、2,244例（11.6%）が修正36週までに死亡した。死亡率は2003年19.0%（99%信頼区間（CI）, 15.7-22.8%）から2016年8.0%（99%CI, 6.2-10.3%）に減少した。修正36週まで生存した17,126例において7,792例（45.5%）がBPDを発症し、その発症率は2003年41.4%（99%CI, 36.5-46.4%）から2016年52.0%（99%CI, 48.2-55.9%）に増加した。生存例における多変量解析にて、酸素投与または侵襲的人工換気 \geq 4週、出生体重 $<$ 750g、Small for gestational age、非侵襲的陽圧換気 \geq 4週、絨毛膜羊膜炎、在胎週数 $<$ 26週、年間登録症例 $<$ 20例の施設、および治療を要した動脈管開存症は、BPD発症と正の関連を認めた。侵襲的人工換気期間は短縮されたが、BPD悪化に関連する因子の割合は研究期間中に概ね増加する傾向がみられた。

以上より、超早産児の死亡率は減少したが、生存例におけるBPDの割合は増加していることが明らかとなり、侵襲的人工換気期間の減少にも関わらずBPDの割合が増加していることは、患者背景やその他の管理方法の変化がBPD発症に影響していることを示唆すると考えられた。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定し、博士（医学）の学位に値すると認める。